

## 書評会イントロダクション

### An Introduction to Book Review Colloquium

岩崎 稔

IWASAKI MIMORU

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

原稿受理日：2020.3.18.  
*Quadrante*, No.22 (2020), p.69.

科学研究費補助金基盤（A）「批判的地域主義に向けた地域研究ダイアレクティブ」に基づく研究プロジェクトは、新進の研究者の新刊を対象とする書評コロキウムを断続的に開催してきている。そのひとつとして、2019年3月17日には、逆井聡人氏の『〈焼跡〉の戦後空間論』（青弓社、2018年）をとりあげ、『冷戦期東アジアと〈廃墟学〉の射程』と題する特別セッションを開催した。評者には、本学名誉教授の歴史社会学者中野敏男氏、朝鮮大学校教員で植民地文学論の専門家である李英哲氏、五年前に『「在日朝鮮人文学史のために——声なき声のポリフォニー』（岩波書店、2014年）を発表し、在日文学研究に大きなインパクトを与えてきた宋恵媛氏、それにこの会の直後に金武湾闘争をテーマとする力作『共同の力』（世織書房、2019年）を世に問うことになる新進の沖縄研究者で本学専任講師の上原こずえ氏にご登壇いただいた。趣旨説明は李孝徳教授、司会進行役は岩崎稔が務めた。

30人を超える聴衆を集めた当日の議論はきわめて白熱したものとなり、海外事情研究所が展開している数ある研究会のうちでも、際立って大きな成果を上げた研究会のひとつ

なった。応答者となった著者逆井にとっても、今後の研究の新しい萌芽を数多く獲得した機会になったとのことである。そこで、この日の報告記録のうち、上原氏と宋氏の書評報告、およびそれに対する逆井氏の応答をここに掲載し、一連の書評コロキウムの代表例として紹介することにしたい。なお、当日の研究会は本学を中心に定期的で開催されているWINC (Workshop in Critical Theories) との共同開催であった。

